

12

加藤周一著作集

藝術の精神史的考察 II



加藤周一著作集

12 加藤周一著作集
藝術の精神史的考察 II

加藤周一 編集

平凡社

加藤周一著作集12 (全15卷)

藝術の精神史的考察 II

一九七八年十一月二十日 初版第一刷発行

著者 加藤周一かとうしゅういち

装幀 池田満寿夫

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

〒102 東京都千代田区四番町四

電話 〇三(二六五)〇四五

振替 東京八二九六三九

印刷 明和印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

定価 一八〇〇円

© 加藤周一 1978 Printed in Japan.

製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい(送料小社負担)。

目

次

I

日本の美学

5

藝術論覚書

34

洋画と日本画の区別について

51

II

仏像の様式

69

茶の美学

122

日本の庭

136

III

葉師寺雑感

169

『源氏物語絵巻』について

179

宗達私見

189

宗達の世界

196

光悦覚書

214

日光東照宮論

221

祇柳随筆

238

『南画大体』について

258

鉄斎覚書

264

IV

ヨーロッパとは何か

271

藝術と形式

294

V

肖像画について	331
一枚のポツシユに	344
ヴィーンの想い出	349
美術史の縮図	363
ルオーの藝術	380
ジャコメッテイまたは純粹藝術家	388
あとがき	399
初出一覧	402

加藤周一著作集



12

加藤周一著作集

藝術の精神史的考察 II

加藤周一著作集 12

藝術の精神史的考察Ⅱ

日本の美学

1

私はここで、日本の美学、いわゆる日本的な美しさというものはなんであろうか、少くともその一面をはっきりさせるために、一つの提案といえますか、仮説を申し上げたいと思います。

日本の美術史は、縄文・弥生の土器とか埴輪とか、そういう考古学的な材料を除きますと、だいたい六世紀ごろから、仏教美術——飛鳥の美術ではじまるわけですが、天平の時代、八世紀には一つの頂点に達します。その八世紀を見るときに、いちばん私たちの注意を引くことは、文学と美術とのあいだに、大きな違いがあるということです。奈良に、また近畿に、広くたくさんの寺院が建てられて、今日でもその多くが残っている、そういう時代。建築ばかりでなく、彫刻も、絵画（壁画）もみな仏教に関係があり、仏教に関係のない美術は、ほとんどなかったといってもいい。しかし同じ時代に、文学のほうでは、日本中から集めた『万葉集』という大がかりな詩集

ができて、そのなかには仏教的な要素がほとんど全くないのです。仏教美術の黄金時代、仏教が国教になり、天皇自ら仏教徒になるという時代の、代表的な詩集が、ほとんど仏教的要素を含んでいないというのは、驚くべきことです。キリスト教の黄金時代は、中世ヨーロッパで一二世紀から一三世紀でしょうが、そのときちょうど日本で寺院が建ったように、たくさんのカテドラルが建った。ほとんどすべての藝術は、音楽も絵画も彫刻も建築も、みなキリスト教的であり、文学もまたキリスト教的であったのです。ですから、日本の八世紀、つまり天平の時代が仏教の黄金時代であったということ、中世のヨーロッパで、一二世紀、一三世紀に、キリスト教が栄えたということとは、意味が違うだろうと思います。

この違いは、実に大きな問題を含んでいて、日本の精神史または思想史を考えるとときに一つの出发点となるでしょう。しかしここでは、そのことには、たち入らず、日本の美学の特質を考えるとときに、仏教美術から出発するのは、あまり便利な方法ではなからう、ということだけを申し上げたい。少くとも天平までの仏教美術には「外来」の性格が強すぎるでしょう。九世紀を移行期と考えて、たしかに藤原時代の寺院建築や仏像には、いわゆる「日本化」の現象がおこります。が、その「日本化」現象を分析して、後の日本美術の発展につなげる仕事は、簡単には行かない。現にこれまで指摘されてきた日本の美的世界の特質というものの多くは、藤原時代のそれも含めて、仏教美術にはほとんど全く通用しません。谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」や、世間でよくいわれる「自然の尊重」ということは、そのよい例でしょう。まず第一に、ご承知のように、平安時代

の仏像にしても、寺院にしても、多彩な、派手なもので、黄金を使ったり、赤や緑の目立つ色を使っています。日本の美が、「陰翳」の世界である、黒と白で、陰がこまかくて、単色な文化であるというのは、仏教美術には、全くあてはまらないでしょう。

二番目には、「自然の尊重」ということ。しかし「自然の尊重」は日本だけの現象ではないから、日本美術をこれで特徴づけるためには、自然のどういう尊重の仕方が日本のものかをはっきりさせなければ、意味が少いでしょう。——ということを一応別としても、平安朝の仏教美術に格別「自然の尊重」がめだつわけではない。たとえば、仏画のなかに、風景が背景として出てくる。不動がいたり、菩薩がいたり、そこに中心があつて、自然の風景の方は、その附足しにすぎません。仏画のなかで風景ないし自然がもっている意味は、キリスト教の中世美術のなかで風景がもっている意味と、同じ程度であつてそれ以上ではなからうと思ひます。したがつて、日本美術が自然と特別の関係がある、自然の尊重がその特徴であるという仮説も、仏教美術にはあてはまらないのです。

そこで日本の美的世界の特質を考えるには、どこから出発したらよいだらうか。仏教美術を別にして、時代をさかのぼってみると、「絵巻物」殊に『源氏物語絵巻』に行き着くのではなからうか、——というのが、私が申し上げようとする仮説の第一の要点です。文学の場合にも、その一つの源泉は『源氏物語』ですけれども、美術の場合にも、『源氏物語絵巻』から出発して、日本美術の特質を取りだして見ることができのではなからうか。『源氏物語絵巻』のなかに、日本の美

的感受性の著しい特徴が、すでに具現されているのではなからうかというわけです。『源氏物語絵巻』の現存する部分は、名古屋の徳川美術館と、東京の五島美術館にあります。それができあがったのは、藤原時代です。時代についてはいろんな説があつて、ある人はかなり下げて考え、ある人はずいぶん上げて考えますけれども、とにかく『源氏物語』そのものよりは、少くとも一〇〇年ぐらい後だろうということになるらしい。藤原時代には、ご承知のように、だいたい九世紀の終りに遣唐使がなくなつて、中国大陸との交渉が少くなつていきますから、仏教美術さえも「日本化」したといわれている。いわんや大和絵の系統……大和絵ということばそのものがあらわしているように、絵巻物の様式は、主として日本で発達したものです。これをこまかく見れば、日本に固有の特徴が、わかるかもしれないと考えられます。

絵巻物には、普通、二つの系統が区別されている。一つは俗にいう男絵、もう一つは女絵というものです。女絵の系統で今のこつているいちばん古いものが『源氏物語絵巻』です。男絵の系統で古いものは『信貴山縁起』といわれる。鎌倉時代になると、『北野天神縁起』とか、この系統に優れたものが出てきます。二つの系統の違いは、男絵のほうは、強い、黒い線を使って、個性的な、表情に富んだ顔を描いている、女絵のほうは描線を細く、顔がいわゆる「引目鉤鼻」というやつで、個性がないということが、一つです。それから、色の塗り方も違います。女絵のほうは、鮮やかな濃い色を塗っていますけれども、普通、男絵のほうは淡彩です。これはデッサンというか、線の絵です。男絵と女絵と両方に共通の特徴もあります。たとえばよくいわれるように、

建物の屋根を描かないで、中が見えるようにして、それを斜め上から見おろした構図が典型的で、これを「吹抜屋台」という。そういうことは、どの美術史の本にも書いてあります。

男絵の世界は、さまざまな状況、さまざまな場面、違う階層の人間が驚いたり、悲しんだり、あるいは怒ったり、あるいははずるような様子をしたりしている世界です。そういう日常生活の感情が、顔にあらわれたところを、男絵をつくった画家は、こまかく鋭く観察して、特徴を誇張して、ほとんど漫画化して描いている。男絵の世界の特徴は、違うさまざまな階層の人間が出てくるといふことと、いろんな生活感情があらわれているといふことでしょう。人物の理想化といふことがない。むしろ現実にある人間を、活き活きと描くことが主になっています。その背後にあった精神は、實際生活での経験に豊かで、現実を美化したり理想化したりせず、どういふ偏見や幻想にも囚われずに、ありのままの人間を直視した精神だといつてよいでしょう。

ところが女絵のほうは、つまり『源氏物語絵巻』の系統は、色の配合がきれいで、顔は型にはまっているけれども、姿勢や、着物や、建物の背景や、そういうものが優雅で、美的に洗練されている。出てくる人物は、ほとんどみんな貴族です。ちようど『源氏物語』そのものがそうであるように、ほとんど田夫野人はそこに登場しない。純粹な宮廷藝術で、美的洗練に徹底したのです。

これを大ざっぱにいうと、男絵のほうは、人生と直接に、相結んでいる。『信貴山縁起』でも『北野天神縁起』でもそうですが、こういう絵巻物がわれわれに訴える力は、そこに出てくる人

間の表情や姿勢の活き活きとした描写からきています。要するに、人生のなかでの感動と、絵画から受ける感動とが、非常にちかいです。男絵系統の絵画は、人生と相わたるところ、もっとも深いものである。ところが女絵の系統、『源氏物語絵巻』がわれわれに訴えるのは、それが直接にわれわれの人生の特定の場面や経験を喚びますからではなくて、むしろわれわれの経験からは遠い美しい世界を、そこに作りだしているからです。女絵と男絵との対照、あるいは『源氏物語絵巻』と『信貴山縁起』との対照は、つまるところ美学と、実際の人生との対照であるといえるでしょう。

このような対照は、ある程度までは、藤原時代の文学にもあらわれています。文学で、『源氏物語絵巻』と見合うのは、これはもともと挿絵ですから『源氏物語』に違いない。実際の人生の経験を活き活きとあらわした文学、『信貴山縁起』に見合う文学作品は、おそらく『今昔物語』の本朝部のなかの、仏教に関係のない部分、世俗の物語の部分だろうと思います。これはその当時に知られていた民間の話をたくさん取っている。なかにはかなり小説がかった挿話もあります。文体からいっても、話のすじ書きからいっても、出てくる人物の種類からいっても、実際の、荒っぽい生活の、活き活きとして飾らない描写です。舞台を宮廷にかぎり、登場人物のいたりしたりすることが、美化され、優美に洗煉されている『源氏物語』の世界とは全く別の世界です。

要するに、藤原時代に、一般に中国との関係が少なくなったときに、わが国の文学にも、絵画にも、いま申し上げたような二つの系統が発達したのです。そこで日本の美学、あるいは美的感受